



創業者・古谷一郎氏から「せい家」山内勝彦氏へ運営交代 ラーメン人生30年「攻める組織」で進撃



ラーメンの味のジャンルに「家系」がある。濃厚な豚骨醤油スープのラーメンで、1974年、横浜市内に誕生した店が発祥。大繁盛店として名をはせ、家系ラーメンの弟子が育っていき、一方では触発された若者たちが続々と同様の店を開業した。ここで紹介する「なんつっ亭」と「せい家」もこれに触発された組である。「なんつっ亭」はやんちゃな少年だった古谷一郎氏(55)が94年9月に神奈川県・秦野市で創業、極めて独創的な黒マー油ラーメンを作り上げた。「せい家」は山内勝彦氏(66)が98年2月に東京・経堂で創業した。

この話題のメインは「せい家」の山内氏である。山内氏がラーメンの世界に入るまでは紆余曲折あった。早稲田実業でピッチャーを務めたが、野球の名門に進まざバ



④神奈川県秦野市にある「なんつっ亭」本店は月商900万円の繁盛店。⑤基本メニューは黒マー油ラーメンでスープはクリーミー

なんつっ亭

イロットを目指した。だが夢は果たせずフリーターとなる。26歳の時に事務機器の販売会社に入社。ここでトップセールスマンとなった。

36歳の時に家系ラーメン発祥の店と出会う。11時から20時までの9時間営業、20坪で1日の売上60万円。山内氏は「この店を東京に出したい」と修業を申し出ると、オーナーに「修業はしなくていい。社長となって店舗展開してほしい」と言われた。

雇われ社長を6年間勤め上げ42歳の時に「せい家」で独立開業。1杯500円という

親しみやすい価格も手強い人気を博し、FCでの開業希望者が詰めかけた。これらの事業は、ラーメン店を運営する会社と、これらに人材を送り込む会社の2本立てで営み、ピーク時は43店舗を擁していた。

その後、ラーメン事業で勢いを増していた飲食企業が「せい家」の運営会社を買収する話が舞い込むが、話は立ち消えに。山内氏は本格的に事業譲渡を検討し、M&A仲介業者に相談したところ、買主がすぐに表れた。こうして2019年12月、この会社に運営会社を事業譲渡した。

山内氏は買主から「2年間は飲食事業に関与しない」という行動制限が設けられ、充電期間に入ると、20年3月からは本格的なコロナ禍となった。

そして2年間の行動制限が明け、山内氏は再びラーメン事業者として生きていこうと決意。再スタートは複数店を展開する会社の買収からと思い、M&A仲介業者に相談すると「なんつっ亭」を紹介された。

創業者の古谷氏はラーメン事業者より市民活動家の側面が強くなっていたこともあり、22年12月、人材派遣業の「せい家」が「なんつっ亭」を運営する会社となった。現在4店舗、いずれも繁盛店である。

「なんつっ亭」の新しい体制にはかつての「せい家」の精鋭が戻ってきて「5年後20店舗」を見据えている。中途採用者の初任給を32万円から35万円に引き上げて「攻める組織」を作ろうとしている。山内氏は「私の人生はラーメン30年、この経験値を新しい人生に生かしていきたい」と語る。

(千葉哲幸)